

再スタート3年目の“Fukuoka”、世界へ走り続けるランナーたち

来年の東京世界陸上代表入りを狙う西山と再起を期すカロキ。 トヨタ自動車勢同士の優勝争いもあるか？

西山雄介（トヨタ自動車）は過去4レースで、日本人選手に敗れたのは一度だけ。日本選手間では無類の強さを見せるが、世界を狙ってさらにレベルアップを期している。同じトヨタ自動車所属のビダン・カロキは、21年以降の低迷から抜け出す兆しを見せている。

●毎回アップデートしている西山のマラソン練習

パリ五輪代表入りを逃した西山雄介が、再び世界に挑むために初めて福岡国際に出場する。MGC（マラソン・グランドチャンピオンシップ。パリ五輪代表3枠のうち2人が決定）は、万全の準備をした自負があった。それが気負いとなったのか、後半で大きくペースダウンした。最後のチャンスだった東京マラソンは日本人1位と健闘したが、選考規程の2時間05分50秒に41秒届かなかった。

「しばらくは何も考えられませんでした。ゆっくり落ち着いて考えた中で、もう一度世界の舞台に立ちたい、と思い始めました。パリで家族に見せる予定だった走っている姿を、来年の東京世界陸上で見せたい。世界陸上はオレゴンで30km過ぎのペースアップに付けず、“世界の壁”を痛感させられた悔しさがあります。そのリベンジの意味でも挑戦したい」

西山を指導するトヨタ自動車の佐藤敏信総監督は、2時間06分30秒の世界陸上参加標準記録と日本人1位は「最低基準」と考えている。「気象条件やペース次第では2時間5分台に行きたいね、と西山と話しています」。福岡のコースでの日本選手最高記録は2時間06分51秒（00年・藤田敦史。当時日本記録）で、2時間6分台はその1回だけ。福岡で2時間5分台を出せば高く評価される。

西山自身はマラソンの結果に一度も満足していない。唯一初マラソンがある程度は納得できたが、それでも当時の初マラソン日本最高に5秒届かなかった。

しかし満足しないから、「練習は毎回アップデート」（西山）してきた。MGCだけは結果に結びつかなかったが、それ以外の3回は一度も日本選手に負けていないし、地力は着実にアップしてきた。

「福岡に向けては佐藤総監督とも相談して、練習のペースを一段階上げています。故障につながらないように、（負荷が高い練習の間に行う）ジョグを工夫したり、自分の体の状態をしっかりと確認したりしながら行ってきました」

佐藤総監督は7月に北海道で出場した10000mのレース内容に、成長が感じられたという。ペースメーカーが予定より早くリタイアしてしまい、7000mから残り3000mを西山が1人で押し切った。暑さもある中で28分08秒53と自己記録に迫ったのだ。

10月の東京レガシーハーフマラソンも1時間01分13秒で日本人トップの8位。西山自身が目標としていたタイムより1分速かった。「レースの流れが良かったこともあります。良い感じで動いていました。後半の上りもしっかりまとめる走りをしました。福岡に向けて良かったと思います」（佐藤総監督）

西山が狙うのは日本人1位ではなく優勝だ。トヨタ自動車は前身の福岡国際マラソン選手権18年大会で服部勇馬が、19年大会で藤本拓が外国勢を抑えて優勝した。その2人も指導してきた佐藤総監督は「（西山）雄介が3人目になってほしいですね」と期待する。

●カロキは「トヨタ自動車入社後一番の練習」

トヨタ自動車勢ではビダン・カロキが、今大会出場選手中最高の2時間05分53秒の自己記録を持つ。34歳のベテランで高校、実業団と18シーズン、日本国内チームで競技を続けてきた。かつてはトラックの10000mで、12～17年の間に開催されたオリンピックと世界陸上5大会全てで入賞した。

17年から本格的にマラソンに進出。同年ロンドン3位、19年東京2位、同年シカゴ4位など、マラソンでも世界レベルで活躍してきた。2時間3～4分台の自己記録を出しても不思議はない。その理由が故障だった。

21年の中部実業団対抗駅伝で肉離れをしてから、以前のような練習ができなくなってしまったという。21～23年の間はトラック種目やハーフマラソンの記録は低迷し、マラソンには出場できなかった。

しかし今年3月の東京でマラソンに復帰。2時間07分59秒の16位と復調に向けての一步を記した。熊本剛監督はカロキの近況を「トヨタ自動車に（2020年に）入社してから一番、練習が積めています。本人も自信を持っているようです」と話す。

カロキは前身の福岡国際マラソン選手権の17年大会で、2時間08分44秒の4位になっている。福岡出場はそれ以外にもあり、13年と18～20年の4大会ではペースメーカーを務めた。

25kmや30kmまでを2時間6分以内のペースで先導するには、かなりの走力が必要だ。そのスピードが全力になってしまえばペースに乱れが生じやすくなり、後ろを走る選手たちは記録を出しにくくなる。その点カロキのペースメイクは日本人選手たちにも好評だった。当時は前所属ではあったが、服部と藤本が優勝した18、19年もカロキがペースメーカーの1人だった。

西山とカロキが競り合う展開が、トヨタ自動車としては最高のシナリオになる。2人は同じ練習メニューは行っていないが、食事を寮で一緒にとることも多い。熊本監督が次のようなエピソードを話してくれた。

「スタッフがカロキに『雄介が良い練習をしているよ』と話したり、『カロキがこのくらいのタイムで走っていた』と雄介に伝えたり。お互いに意識していると思いますよ。福岡で勝負をするイメージを持っているはずですよ」

18年大会の服部は35km以降で大きくペースアップして、2位に1分27秒の大差をつけた。優勝記録は2時間07分27秒だったが、ペースメーカーのカロキが25kmで外れ、30kmまではペースがかなり落ちていた。それがなければ福岡国際日本人2人目の2時間6分台が出ていたかもしれない。

今年は好調のカロキが優勝を狙ってくる。西山ら日本選手とカロキが競り合えばペースは落ちない。2時間6分台は出て当然で、2時間5分台の優勝記録になる可能性も十分ある。

■マラソン全成績＝西山 雄介

回数	年	月日	大会	全体順位	日本人順位	記録	中間点通過
1	2022	2.06	別大	1	1	2.07.47.	1.03.39.
2	2022	7.17	世界選手権	13	1	2.08.35.	1.04.08.
3	2023	10.15	MGC	46	46	2.17.49.	1.04.11.
4	2024	3.03	東京	9	1	2.06.31.	1.02.55.